（続紙　１　）

京都大学	博士（経済学）	氏名	桝井靖之
論文題目	ヤスパースの人間学的哲学への歩み ～『哲学すること』に基づく精神医学から実存哲学への自己啓蒙的展開～		

（論文内容の要旨）

本論文は「実存主義への熱も冷め、ヤスパースへの注目がおさまった」現在にあって、精神医学から哲学へと学問的立場を推し進めたヤスパースの「研究者としての歩み」を跡づけることによって、ヤスパースの学問的、思想的発展を正確に理解しようとするものである。

論文は二部構成となっている。

第一部は「ヤスパースの『人間学的構想』に基づく精神哲学から実存哲学への歩み」と題され、以下の3章が置かれている。

第1章「ヤスパースの思想的・学問的軌跡」、第2章「ヤスパースと人間学的構想」、第3章「ヤスパースと同時代の哲学者たち」。

第1章ではヤスパースの人生が三期に区分され、法学から医学に転じてからの、医学博士として精神医学を研究した前期、より広い視野からする人間存在解明の方法を構築した中期、そして「包括者存在論」という概念にたどり着く後期である。それは主著で言えば、『精神病理学原論』から大著『哲学』全3巻をへて、『理性と実存』や『真理について』への歩みである。

第2章は精神医学から哲学へ転じた理由を掘り下げている。その理由は優れた精神医学者であったが、気管支拡張症と二次的心不全という難病故に、ハイデルベルク大学の精神科クリニックの臨床医を引受けることができなかったことにある。そのとき『世界観の心理学』が評価されハイデルベルク大学哲学教授の道が開かれたのであった。第二に、ヤスパースにとっては「人間存在」とは何かを解明することこそ重要な課題であって、そこに彼の人間学的構想があった。したがって、ヤスパースにとって、精神医学も心理学も人間存在の解明に寄与するものとして存在したのであって、精神医学にとどまらなければならない理由はなかった。加えてハイデルベルク大学クリニックでのニッスル、グレーレとの精神医学上での切磋琢磨もヤスパースの人間学の発展に有益であった。

第3章は、ウェーバーや新カント派リッケルト、現象学のフッサール、シェーラーなどとの関係を描写する。現象学を精神医学に導入していたヤスパースはフッサールの現象学を見物人の態度として批判し、またリッケルトの科学論を物理学的な科学論であって哲学ではないと批判した。他方、ヤスパースはウェーバーの宗教社会学の中心問題としての資本主義の成立問題を、人間の実存に注目するものとみた。すなわち彼によれば、ウェーバーは実存哲学者であった。またハイデッガーの『存在と時間』を不毛と見なし、それから衝撃を受けなかった。

第二部は「精神医学からの『自己啓蒙的展開』としてのヤスパース哲学」と題さ

れ、以下の３章からなる。第１章「先行研究と自説から見た精神医学から哲学への自己啓蒙的展開」、第２章「『人間学的構想』に基づく『哲学する哲学』としてのヤスパース哲学」、第３章「精神医学と哲学との相関的啓蒙的自己展開」。

第１章では、日本のヤスパース研究をかなり詳細に回顧して、一部の研究者は正しく理解しているものの、通説が『精神病理学原論』の彼の哲学にとっての重要な意義を無視していることを批判する。そして著者は、人間存在の解明こそが彼の前期、中期、後期を貫く重要なテーマであったことを強調している。

第２章では改めて「哲学」とは何か、「哲学すること」とは何かを問うている。著者は既成の構築物として哲学をとらえるに留まらず、思索的営みとしての内的行為として捉えることがより重要だとする。それはカントの見解でもあったし、ヤスパースも同様であった。

第３章では彼の「哲学する」ことを『精神病理学原論』の序文をテクストとして検討している。ここではヤスパースが晩年まで改訂を続けた本書の各版を比較している。そして彼の「人間学的構想」は（１）「人間を全体として問題にする」ものであること、それは中期から後期にかけては「包括者」という概念に結晶すること――「単に一人間の心身全体という視点で理解されるのではなく、世界や神といった他者との内面的な関係性の中で具体的に状況を生きる包括的な存在」として理解されるようになることが主張される。そしてまた（２）人間存在を人間一般ではなく、「今ここに生きているひとりの人間」として問題にするものであること、それは中期、後期には「交わり」という視点と関係すること、さらに（３）人間存在を科学的理解では「汲みつくしえない」人間諸個人として問題にすることとして把握している。したがってヤスパースは、身体的先入観、哲学的先入観、「個別的観点の絶対化」を退けたが、それが彼の実存主義哲学である。

以上の分析を踏まえて、結論で「ヤスパースにある精神医学的哲学者としての歩みと人間学的哲学」において、ヤスパースを精神医学的哲学者として「ハリネズミ型」（バーリン）の思想家であったとしている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、実存哲学者として著名なカール・ヤスパースの哲学の発展を「人間学的構想」の具体化として、首尾一貫した内的論理に即して把握しようとした試みである。すなわち、ヤスパースは初期の精神医学者から後期の哲学者へと転身したという通説を批判し、そこには首尾一貫した人間学、人間存在論の発展があったのだということの論証が目指されている。そしてその目的はかなりの程度に果たされたと言える。著者は執拗にヤスパースの哲学の外見的変化を貫く内的一貫性を求め、その析出に成功していると見なしうるからである。

評価すべき点は以下の点である。

第一に、著者は、ヤスパースが精神医学から哲学へ転じたことを否定するのではなく、その転換の理由は、彼は優れた精神医学者であったが、気管支拡張症と二次的心不全という難病故に、ハイデルベルク大学の精神科クリニックの臨床医を引受けることができなかったことにあるとして、その経緯を詳細に明らかにしている。

第二に、しかしながら、その転換は決して問題意識の変化とか、思想の変化ではなく、外在的な理由を契機としてはいるけれども、内在的な、首尾一貫した思想的発展であり、人間学的構想の展開であり、人間存在とはいかなるものであるかという、哲学にとって本質的な人間学的問いを追求した帰結であることを明らかにしている。

第三に、あまり読まれることのないヤスパースの主著の一つである「精神病理学原論」は彼が終生手を入れ続けた著作であり、その意味で主著であるが、著者はその序文の各版比較を行なって、人間学的構想の内在的な発展をそこに読み取っている。そしてその発展は実存主義哲学への歩みであったことを明らかにしている。こうして彼の哲学は人間を全体として問題にするものであること、人間存在を人間一般ではなく、今ここに生きているひとりの人間として問題とするものであること、さらに人間存在を科学的理解では汲みつくしえない人間諸個人として問題にするものであると把握し、身体的先入観、哲学的先入観、個別的観点の絶対化を退けたものが彼の実存主義哲学である、という解釈が明確に主張されている。

第四に、ヤスパースは８６年におよぶ長い人生において、多彩な人物、学者や思想家（ニッスル、ヴィンデルバント、フッサール、リッケルト、ウェーバー、シェーラー、キルケゴール、ニーチェ、ハイデッガーなど）と出会っており、学問的・思想的な対決を通じて、自らの学問と思想を磨き上げて行ったのであるが、多彩な人物との出会いと別れに踏み込むことによって、興味深い知的伝記を描いている。

こうした功績を認めることができるが、本論文には達成されざる課題が残っていることも事実である。

デカルト、スピノザ、カントなどの古典哲学の影響とキルケゴールに始まる不安と実存の哲学と精神医学とが、ヤスパースの思想世界のなかでどのような構造を形

成しているのかの立体的な描写がなく、議論が「哲学する」という語彙の繰り返しにながれがちになっている。またウェーバーの社会学とヤスパースの哲学が実存への関心でつながっているという指摘はもっともであるが、それ以上の掘り下げが無く不満が残る。さらにまた登場する大思想家の思想はいわば自明とされていて、ヤスパースの思想との比較、対照がなく、思想的格闘が十分に把握できていないという印象が否めない。

著者が引証しているステュアート・ヒューズが行なっているように、世紀末から２０世紀中葉までの思想史の多元的な構造が把握されていれば、ヤスパースの哲学の位置づけもより明確になったであろう。

またヤスパースの実存哲学が、ハイデガー、アレントの哲学や思想とどのように関わっているのか、どこが共通でどこが違うのかという問題を立てて欲しかった。というのは、ハイデッガーのナチズムとの関係に敢然と反対したのはヤスパースであったし、アレントはハイデガーともヤスパースとも深い関係があったからである。ハイデガーとアレントは現代の社会思想の領域で、ヤスパースより遙かに影響力が大きい。しかし、偉大ではあるが、ハイデガーもアレントも問題的な思想家であることは明らかであり、精神科医でもあったヤスパースはハイデガーとアレントの思想的問題性を批判する視点を持っていたと思われるからである。

この最後の点には異論もあるであろうが、要するに掘り下げがもっと欲しい点がいくつも残されていることは否めない。

こうした疑問も残るけれども、その点は本論文の価値自体を否定するものではない。著者は長年にわたる努力によって立派なヤスパース研究を成し遂げたと言いうる。よって京都大学大学院経済学研究科博士学位に相当する業績であると認める。

なお平成２２年１１月１８日に公開審査会を開き、論文内容とそれに関連した試問を行なった結果、合格と認めた。